

我やさき、人やさき、きょうともしらず、あすともしらず、おくれさきだつ人は、もとのしづく、すえの露よりもしげしといえり。されば朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなわちふたつのまなこたちまちにとじ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて、桃李のよそおいをうしないぬるときは、六親眷属あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外におくりて夜半のけぶりとなしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。あわれというも中々おろかなり。

(『御文』五帖目第十六通 聖典八四二頁)

## 白骨の御文—悲なるものの共有として—

第20組 昭信寺

漆崎 正憲

text by Shouken Urushizaki

あるご門徒の所に月参りに行った時、お互いに知っている人が亡くなられたことを告げると、「あの人ねえ。我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らずだね」という言葉が返ってきた。

蓮如上人の御文第五帖十六「白骨の御文」は葬式に読まれるものとして一般によく知られている。文章の大部分が無常の相の記述で占められていて、無常感が色濃く漂うその文は、葬送に読まれるにふさわしい所以だろう。歌のようでもありリズムを含んだ簡潔な文体は聞き易く、我が身を重ね合わせて実感させるものがある。一門不知のともがらに生死の世界の無常感を伝えるため、上人は推敲されたのであろう。この文体の前半は、存覚上人の「存覚法語」と、その元になる後鳥羽上皇の「無常講式」を引用している。原文には、人間の死後、その死体が腐乱し白骨となって朽ち果てていく様子を、九段階で表す九相の転移が書かれているが、御文には最初の「死相」と最後の「白骨の相」があるのみである。「九相」とは、肉体に対する執着を断ち切るための不浄観を修する観想修行のためのものである。また日本美術の中に九相を視覚化した九相図という絵があって、美しい貴族女性が、死体となって腐乱の過程を経て白骨に至る様子が描かれる。その精緻な描写は、哀れというより醜悪さが際立っている。性的煩惱滅却のためとされているが、いずれも出家者のためのものであり、上人は余計なものとして省いたのであろう。

無常の「御文」とされているものは、帖内・帖外合わせて二百五、六十通の中で三十数通あるが、上人58歳頃の「見玉尼往生の御文」が最初と思われる。(田代俊孝)「蝶となりてうせぬとみゆるは、そのたましひ蝶となりて法性のそら極楽世界のみやこへまひりぬ」と、25歳で早世した愛する娘の死を悼む。そして「しかれば、この比丘尼見玉、このたびの往生をもてみなまことに善知識とおもひて一切の男女にいたるまで一念帰命して、仏恩報尽のために念仏もうしたまはば、かなら

ずしも一仏浄土の来縁となるべきものなり」(帖外)と見玉尼の死を浄土往生の機縁とするよう勧めている。見玉尼は、生活のため幼い頃に喝食として禅寺に預けられ、成長してからは浄土宗の尼寺に預けられるが、上人が吉崎に落ち着いた時に呼び戻される。浄土宗の寺にありながら真宗の教えに目覚めて帰ってきた娘を、今や御同行なりと上人は喜んだであろう。しかしその娘の早い死に、親としての深い悲しみと共に無常の理を実感させられる。見玉尼を善知識とせよという言葉に、悲しみを悲しみと受けつつ、それを乗り越え転換し浄化させられるものを感じる。

「御文」で「善知識というのは、阿弥陀仏に帰命せよといえるつかひなり」(二帖目第十一通)と、善知識は浄土への導き手としている。金子大栄は鈴木大拙との対談で「他力は基本的には善知識というものからきている。自覚の教えにはちがいないが、他覚の教えである。他に目覚めしめられた教えである。」と述べている。「白骨の御文」は、肉親の死を通して無常の理を実感した深い悲しみを根底にしている。人間は無常という個を超えた大きな力の前では無力である。無常の世においては、あらゆる存在はそれぞれ悲なるものを有した存在であり、悲を共有した存在と言えようか。そこにまたいのちのつながり、あるいは連帯感というものを感じさせるものがある。悲なるものを悲なるものとして受け入れることは、個々の悲にとどまっている限り、自らの力では及び難いだろう。個を超えた大いなるもの、個々の悲を包む大いなる悲というものはたらきに与らなければならぬだろう。

「わたしゃ、しあわせ、死なずにまいる。生きさせて参る浄土が、なむあみだぶつ」

(浅原才市)